

I. 下記は、ある人類学者が人種について論じた文章から一部抜粋したものである。文章をよく読み、以下の設問に答えなさい。なお、答えの冒頭に設問の数字 (1, 2, 3, 4) を記すこと。

人間は、視覚や聴覚、触覚といった五感を通して多種多様な情報を受信している。しかしそれらの森羅万象を個別にあるがままに理解することは、人間の認知上不可能である。類似したものをまとめ、異なるものとの分類を繰り返す。受信する大量の情報のなかから、それぞれに埋め込まれた記号を識別することにより、脳内の引き出しに蓄積された情報と照合する。それによって初めて瞬時に、眼前の対象や出来事を秩序立てて理解し、予測を行い、対応を判断することが可能となるのである。

またカテゴリーは、情報の受信という認知的次元だけではなく、私たちの行為のプロセスにも現れる。文化人類学におけるエスニシティ研究の金字塔とされる『エスニック集団と境界 (Ethnic Groups and Boundaries)』①のなかで、フレドリック・バルトはカテゴリーについて次のように述べている。「カテゴリーとしてのエスニック集団の区別は、流動性や接触、情報の欠如によるものではなく、排除や統合の社会的プロセスをともなうものである。他方、構成員が生涯のうちに参加や帰属を変えようが、ひとたび差異化されたカテゴリーは維持される」。実際には構成員の流動性がみられるにもかかわらず、集団カテゴリーは人びとのアイデンティティによって維持される。エスニック集団間の差異がカテゴリーによって強調され、それに付随して排除と統合のプロセスが生じる、そのようにバルトは考えた。

バルトのこの主張は、社会心理学者ヘンリ・タジフェルが提唱した「社会的アイデンティティ理論」と通底する。つまりカテゴリー化された人びとは、集団に対するアイデンティティを抱く瞬間から内集団の他の構成員との距離を縮めようとし、内集団と外集団の差を拡大して捉える傾向をもつという議論である。ただしバルトは、環境や社会的コンテクストのなかで境界が維持されるプロセスをより重視している。

このようにカテゴリーには、受信する情報の整理、理解、またそれがもたらしうる影響の予測を促す役割もあれば、内外の集団間の距離を拡げ、人びとがその境界を維持しながら排除や統合・包摂という行為を実践しうる機会も提供するのである。

カテゴリー化は、人間が情報を整理し理解するための普遍的な能力であるが、何をどのように分類するか、そもそも何を指標として分類するかは、あくまでも時代や社会、文化圏によって異なり、それは普遍的でも不可変でもない。

文化人類学では、それぞれの対象社会において、現地住民がどのように自然現象(雪や雨など)や生物(鳥や果実など)を分類し、どのような名称で呼ぶのかについて古くから研究を積み上げてきた。人間については親族や超人的なる存在、他集団などとの関係にみられる分類を通して、人びとの世界観や社会関係、生活システム全般を解明してきた。そうした分類は一般に民俗分類(folk taxonomy)と呼ばれる。われわれが教科書や辞書などで学んできた〈コーカソイド〉〈モンゴロイド〉〈ネグロイド〉あるいは〈白色人種〉〈黄色人種〉〈黒色人種〉などの分類も、あくまでも近代西欧がローカルに構築したひとつの民俗分類に過ぎない②と理解することが肝要である。

アメリカの社会心理学では、人種、ジェンダー、年齢層を人間の分類上の主要カテゴリーと捉えるのが一般的である。『ステレオタイプ化の心理学 (The Psychology of Stereotyping)』を著したデイヴィッド・シュナイダーは、その理由として、それらが視覚的認知において顕著であること、本質的な特徴に何らかの生物学的要素を含むこと、肌の色、ジェンダー、年齢層は、私たちの祖先が他者を区別するために得た知恵にもとづく進化的な重要性をもつかもしいこと、これらのカテゴリーが多くで社会で主要なヒエラルキーを構成していることなどを挙げている。とくに、上記三つのカテゴリーが視覚的に顕著だとする理解は専門家の間でも支持されており、アメリカの社会心理学の臨床現場では、被験者に写真を見せるなどの手法が使われることが多い。

たしかに、人種、ジェンダー、年齢層が人間の分類の主要カテゴリーであるとする定説には首肯できる。ただしそれは人間の心理として一般化できるものではなく、筆者の見地からいえば、ある時期以降のアメリカ、という時間軸と空間軸の交錯する範囲での「民俗分類」としては、という条件付きの話である。フランスの哲学者ミシェル・フーコーが分類論のなかで、一八世紀ヨーロッパの博物学において「視覚に、ほとんど独占的な特権が与えられる」ようになったと語る文章は印象深い。人間の五感のなかでの視覚重視という比重の転換は、あくまでも啓蒙時代のヨーロッパで始まったことなのである。

ここで、アメリカ社会における「人種」の意味づけを相対化するために、世界の他地域とヨーロッパ前近代にしばし目を向けてみよう。まず、肌の色がつねに人間の他者分類の指標になるわけではない。筆者を含む日本学術会議「人種・民族の概念を検討する小委員会」（代表：青柳まちこ）が一九九六年に日本の文化人類学者一〇〇名に対して行ったアンケート調査の結果によると、世界には身体形質以外の生業や宗教、儀礼、服装、土地・居住地、性格などに関する指標を用いて周辺集団や「西洋人」を分類する社会が多々存在する。身体的要素に限っても、肌の色ではなく、髪の色や形状、体型、目の色、眉毛など、身体の異なる部位に注目する社会も珍しくない。また日本人・中国人を「西洋人」とともに「白」で指示する社会や、あるいは「西洋人」を「赤い人」「赤い顔」と形容する社会も、アフリカや中央・南アジア、オセアニアの一部には存在する。

*** (中略) ***

それでは、一七世紀のアメリカにおいてアフリカ人と白人の遭遇以後、互いの肌の色はどのような意味を成していたのだろうか。植民地間でも地域差が大きいので、ここでは歴史学者による先行研究が豊富なヴァージニア植民地を例にとろう。当時の白人と黒人の関係性について数々の先行研究が指摘するのは、年季奉公の白人労働者と黒人奴隷/労働者との親密な関係性である(当初、アフリカ人は後の奴隷と白人年季奉公人の中間的な身分であったとされている)。ケネス・M・スタンプの言葉を借りるなら、「一七世紀の段階では、隷属身分の白人と黒人が、相互に身体上の外見的相違を意識することはきわめて少なかったようである。両者は肩を並べて労働し、余暇には親しくつきあった。そこから多数の混血児が生まれていたが、親が婚姻関係にある場合も含んでいた」。統治する側にあったイギリス人入植者の黒人観はどうだったのか。ウィンスロップ・D・ジョーダンが、アフリカ人の外見と異教徒性に対する偏見はあったとしても、「アメリカに入植したイギリス人にとって特定の宗教的ちがいが肌の色のちがいよりもはるかに重要性を帯びていた」と、この時期の特徴を捉えている。文化人類学者オードリー・スメドリーは歴史学的研究の蓄積を踏まえて、一七世紀において人びとが互いを分類する場合に用いた指標は、肌の色ではなく、自由人か非自由人か、財産所有者か貧民か、キリスト教徒か異教徒か、換言すれば身体形質以外の要素だったと指摘する。

ところが、それが一七世紀末に大きく転換する。プランテーションの劣悪な待遇の改善を求めて起こった一六七六年のナサニエル・ベーコン率いる反乱に象徴されるように、白人植民者たちにとっての最大の恐怖は、白人と黒人、先住民の労働者が一致団結してかれらに抵抗することであった。その連帯を分断するために、黒人に対する差別的な法律と白人奉公人を優遇する法律が次々と並行して定められていったのである。一七世紀末から奴隷貿易によって連れてこられた黒人の数は急増し、一八世紀転換期前後から奴隷制は厳格に組織化されるようになる。

*** (中略) ***

カテゴリーは、他者から押しつけられるものとは限らない。前述のバルトの議論でも明らかのように、集団カテゴリーは一般に、人びとのアイデンティティの形成・維持・選択に重要な役割を果たし、また社会運動や政治活動においても不可欠なツールとなる場合が多い。そのひとつが「アイデンティティ・ポリティクス (identity politics)」^③である。

※3 ページ下部に出典を追記しております。

アイデンティティ・ポリティクスとは、人種、エスニシティ、ジェンダー、性的指向などの社会的属性にもとづいてアイデンティティを動員し、「差異」をエンジンとして社会運動を展開する政治を指す。一般には、長年にわたり社会的・政治的に抑圧され、不当な待遇を受けてきた少数派が、差別の基軸となってきた属性をもとに実践する場合が想定されるが、近年ではドナルド・トランプの支持層を中心にホワイト・アイデンティティ・ポリティクスの台頭現象もみられる。それがとりうる形態は、権利や資源拡大のための社会運動に限らず、差異の承認を求める運動、選挙や法案の可否投票、あるいはメディアやポピュラー・カルチャーにおける公共空間の再配分の要求など多種多様である。

とりわけセンサスに象徴される制度化された人種カテゴリーから、個々人が自己のアイデンティティにもとづいて人種・エスニシティを選択・申告するという行為は、集団アイデンティティを再生産し、カテゴリーの境界を補強する。しかも、元来多くの場合は状況依存的・重層的である個々人の複数形のアイデンティティが、固定的で不動であるかのように集団アイデンティティへと回収される。そればかりでなく、人種カテゴリーをめぐっては制度的承認を得た集団アイデンティティが「真正さ」を獲得し、それ以外は周縁化されるという分水嶺ともなっている。

ところが、アメリカでは一九九〇年代末までに「ポスト・アイデンティティ (post-identity)」「ポスト・レイス (post-race)」あるいは「ポスト・ブラック (post-Black)」という言葉が若者を中心に拡がり始めた。九〇年代といえば、無抵抗のロドニー・キングを激しく殴打した白人警察官全員に無罪判決が下ったことから発生した一九九二年のロス蜂起、セクハラ疑惑下での保守系黒人男性クラレンス・トマス連邦最高裁判事の任命、ベストセラーとなったアーサー・M・シュレージンガーJr.著の『アメリカの分裂 (The Disuniting of America)』(一九九一年)の出版など、人種間の対立や黒人内部のジェンダー関係がメディアでもクローズアップされる事件が相次いだ時代である。また多文化主義をめぐる批判も前景化していた。激しい人種間対立と人種カテゴリーにもとづく資源競争、「人種による分断」というレトリックなどに対する疲弊が社会的に鬱積していたといっても過言ではないだろう。他方、さまざまなマイノリティの中産階級への大規模な階層移動や、エリート移民の増加、保守共和党の黒人政治家の台頭等もこの時代の特徴として指摘されている。マイノリティのとくに若者たちの間では、人種を声高に叫ぶのではなく、次の時代への移行が待ち望まれていた。この新しい風が吹き込んでいた時代に、「融和」の象徴とされたバラク・オバマ大統領が誕生したのである。

多数派・支配層と異なり、マイノリティ化された人びとは歴史的に有徴化されてきただけに、好むと好まざるとにかかわらずカテゴリーに向き合わざるをえない。

※ページ下部に出典を追記しております。

設問 1 下線部①『エスニック集団と境界 (Ethnic Groups and Boundaries)』でバルトが論じた主な内容について、知るところを簡潔に述べなさい。

設問 2 下線部②で筆者が「ひとつの民俗分類に過ぎない」と指摘する理由について、本文から読みとれることを記しなさい。

設問 3 下線部③「アイデンティティ・ポリティクス (identity politics)」に関し、文化人類学ではこれまでどのような議論がおこなわれてきたか、知っていることを簡潔にまとめて記しなさい。

設問 4 本文から読みとれる、「人種」を中心とするカテゴリーに対する筆者の考えを簡潔にまとめたうえで、これについてのあなた自身の考えを述べなさい。

※WEB掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。

竹沢泰子『アメリカの人種主義——カテゴリー／アイデンティティの形成と転換』
名古屋大学出版会 (2023年) p.6-10, 16-17

Ⅱ. 次の問題から 3つ選び、冒頭に選んだ問題の記号を明記して、文化人類学の立場から答えなさい。

- A. 「自然」と「文化」の二元論を乗り越えることが、なぜ文化人類学にとって重要なテーマだと言われているのか。あなたの考えを述べなさい。
- B. 現代社会におけるジェンダー格差の問題に対してどのような議論ができるか、人類学的研究事例を引用しながら、あなたの考えを述べなさい。
- C. 「開発人類学 (Development Anthropology)」と「開発の人類学 (Anthropology of Development)」の違いを簡単にまとめたうえで、現代におけるこの区別の有効性について、あなたの考えを述べなさい。
- D. 文化人類学における今日の親族研究の意義について、具体的な事例をもとに、あなたの考えを述べなさい。
- E. 「応用人類学」「公共人類学」「応答の人類学」など、人類学の知を社会に活かす取り組みについて、あなたが知っていることをまとめたうえで、今後の発展の可能性について、あなたの考えを述べなさい。
- F. アニミズムに関する既存の議論を踏まえながら、アニミズム研究の今日的な意義について、あなたの考えを述べなさい。
- G. 「社会に埋め込まれた経済」について、あなたが知っていることをまとめたうえで、現代の市場経済（商品経済）のもとでのこの概念の有効性について、あなたの考えを述べなさい。
- H. ポストコロニアルな状況下における人類学的研究とはどうあるべきか、具体的な事例をもとに、あなたの考えを述べなさい。

Ⅲ. 文化人類学コースにおいて今後どのような研究を計画しているか、テーマおよび研究方法を具体的に述べ、主要な先行文献を書き添えなさい。Ⅲ用解答欄に句読点を含めて300字以内で記すこと。また、関連する卒業論文やゼミ論文（予定を含む）、あるいは既発表論文があれば、欄外（解答欄の下部）にその題目を付記しなさい。外国語の場合は日本語訳を添えること。

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(裏へ続く)

——これより先の余白には絶対に記入しないこと——

(裏へ続く)

